

味・修正のための話し合いに当てることになる。また、必要な技術修得のための講習会や、類似の事例を行っている近隣地域への視察旅行などを企画することも効果的である。

Step-7【実行】

計画の実行。この実行によって、長い間の抑圧で埋もれてしまっている人々の自信と誇りを掘り起こす。

Step-8【評価】

客観的評価。何が成功したのか。何が失敗だったか。メンバーは役割分担をしっかりと果たすことができたか。様々な問題点を、客観的な視点から、なるべく多くの参加者を交えて話し合う。

CO実践者は、一連のプロセスを観察して得られた知見をコメントすることで、議論に参加することもできる。

Step-9【反省会】

感想・体験の共有。組織化の真の目的は、住民一人一人の意識変革(問題を自力で解決する潜在能力に自ら気づき、育む意欲を引き出す)であるから、参加者による事後の主観的意見の交換は極めて重要である。したがって、ここでのトピックは行動の中味そのものより先、それに参加した各個人の内面の変化についてである。このためしばしば、この集会ではコミュニティ意識を高めるために、他者に関心を持ち手伝えること、リーダーシップと権威の緊張、自由と民主性といった問題を取り上げることは有効である。



Step-10【住民組織の結成】

継続的な活動を可能にするため、公式な住民組織を結成する。また、さまざまな活動を積み重ねることによって、組織は強化されて行く。

おわりに(個人的感想)

アジアのスラム・スクワッター・ホームレス等の貧困者運動の最近の展開を見ていると、運動のやり方や性格がかなり変化しているように思う。70年代は上述したコミュニティを組織化して行政等と対峙していく対立型運動が中心であった。外部からコミュニティ・オーガナイザーを現場に送りこみ、そこで組織化を行い対決を通してコミュニティの強化をはかるアリンスキーの方式は大きな影響力を持っていたのだと思う。そして現在もなお、強制排除がしばしば行われており、このような運動は今なお必要性を持っている。

しかし、80年代以降は2種類の新しいタイプの運動が新たに展開されてきた。ひとつは行政等とのパートナーシップを築いて住民の利益を獲得して行く運動であり、もうひとつは住民自身による自立的な地平を築いていく運動である。後者は、住民自身の共同体をベースとした貯蓄・信用グループや別の地域の住民自身どうしの経験交流などを有効な手段として展開していくわけだが、その際には、外部者であるコミュニティ・オーガナイザーの役割より先住民自身または住民のリーダーの役割が非常に重要となるし、オーガナイザーよりもリーダーの養成(成長)

がポイントとなってくる。そして90年以降のアジアでは、こちらの運動の方が影響力が大きくなってきているようである。

なお、このような全体的状況の変化において、同じアリンスキーの方式を受け継いだLOCOAのメンバーである各国の組織のやり方でも、それぞれによってかなり違いを感じる。例えばインドネシアのUPCなどは、コミュニティ・オーガナイザーの養成より先コミュニティ・リーダーの養成に力を入れているし、リーダーとオーガナイザーを厳密に区別していないように思われる。これに対して、フィリピンやインドでは伝統的なアリンスキーの方式にできるだけ忠実であろうとしているようである。私個人としては、自由度が大きく、より当事者が主体的に動ける運動の方向により大きな関心を持っている。

個人的に日本の野宿者運動を見ると当事者の主体性と言う観点では、これらアジアの運動に大きく遅れをとっているように思う(日本において野宿者自身の主体的運動が可能なのかという異論もあるが.....)。しかし、のじれんの運動の在り方は、現状の限界を受け入れながらも出来るだけ野宿者自身の主体性を尊重して、彼ら自身が自分たちの運動の方向性を自分たちで決定していくようなあり方を模索している。また、種々の特殊性から限界は多いだろうが、出来る限り共同性にフォーカスを当てたいと考えている。そして一部の長い期間、現場に密着している支援は、直感的に上述したコミュニティ・オーガナイザーの役割を果たしている部分が多いと思う。しかし、新しい支援が短期的にそのような役割を果たせるようになるためには、上述のようなトレーニングが必要なのかもしれない。また現実的には当分の間、支援者がコミュニティ・オーガナイザー的な役割を担いながら当事者の間に入りこんで行くしかないのだろうが、本来ならばさらに、外部者としてのオーガナイザーではなく、野宿している当事者たちが自らのリーダーを選び、そのリーダーが育ちオーガナイザー的な役割を果たして行くようになればよいと思う。これは夢に過ぎないのだろうか。

